

寒冷地でイチジク栽培～試行錯誤で安定供給目指す～

富谷市の若生文夫さんは、いちじく 20 畝を栽培している。

栽培のきっかけは、平成16年に蔵王町を旅行した際に、いちじく圃場を見たこと。温暖な地域で育つとされる作物が、冬場の寒さが厳しい地域でも育っている様子から、富谷市でも栽培できるのではと考えた。

若生さんは生食向けで販売しており、品種は日持ちを考えて、裂果しにくいとされるバナナネやビオレ・ソリエスを育てている。

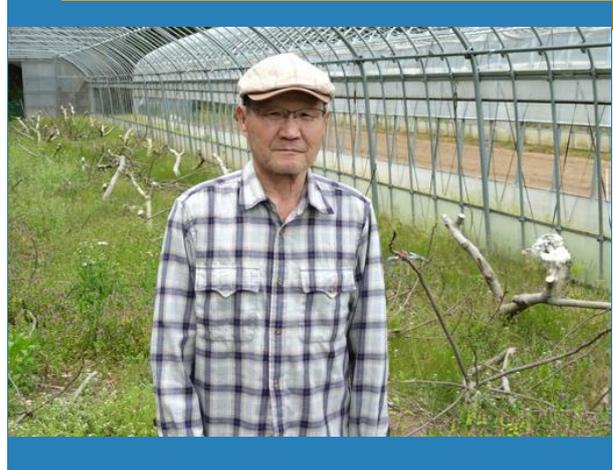
収穫した果実は、近隣の産直施設や菓子店に販売している。若生さんは「県内では甘露煮など加工用が主流のため、当初は売れ行きが悪かった。新興団地に他県の移住者が増えてから、売れ行きが良くなった」と話す。

手探りの栽培で多くの失敗をした若生さん。「いちじくは枝の節々に結果する。堆肥を多く使用したアスパラガス圃場跡に定植してしまい、枝ばかり伸びて実が付かなかったこともあった」と振り返る。

2年前にはイノシシが樹を掘り返す事態もあったが、補植して再スタートを切る。「失敗するからこそ成功した時がおもしろい。試してみたいことがまだある」と意気込みを語る。

【取材】宮城県農業会議

若生文夫さん



イノシシ被害後に補植したイチジク圃場



常に補植用の苗を栽培している

